

編集後記

鹿児島の夏の風物詩がようやく帰ってきました。六月燈は以前の華やかさが戻り、おぎおんさあは5年ぶりの通常開催で好天の中、盛大に行われました。世間はコロナ4年目にしてやっと終わりの始まりが見えてきた様子です。一方、県内の新型コロナウイルス感染者は5類引き下げ以降も増加傾向にあり、引き続き感染対策を心掛けたいと思います。

「論説と話題」では平成26年度から設置された医師会病院あり方委員会についての報告です。医師会病院の経営改善と安定化を図りつつ、地域医療構想、新型コロナウイルス感染症、地域包括ケア、緩和ケアなどに対応するプランなど、令和3年度までの委員会活動について説明されています。

「誌上ギャラリー」には平田宗興先生から傘雲を纏った夏の桜島の写真をご提供頂きました。夕日に映えるユニークな桜島の一コマです。

今号、緑陰銷夏号では歴史、社会、趣味など多彩なテーマでそれぞれ読み応えのある随筆をご寄稿頂きました。これら緑陰随筆を傍らに暑い夏を乗り切って頂きたいと思います。

「医療トピックス」くすり一口メモには鹿児島市医師会病院薬剤部の桐野玲子先生から空腹時に服用する薬剤についてご紹介頂きました。分子標的薬をはじめとする抗がん剤、糖尿病治療薬、消化管機能調整薬など、効果的な血中濃度を得るために適切な服用法が解説されています。

「学術」には南風病院循環器内科の今村正和先生から「SGLT2阻害薬が再入院抑制に有用であった超高齢HFpEFの1例」を、国際医療福祉大学大学院医学研究科循環器内科の岸拓弥先生からは「心不全ステージ分類を人生とEFで考えたら見えてくるSGLT2阻害薬の使い方～まだできる・もっとできる～」をご寄稿頂きました。元来、糖尿病治療薬であるSGLT2阻害薬の心不全治療における有効性と展望について詳述されています。これらの論文からプロ

プラノロールに偶然血管腫抑制効果が発見された結果、乳児血管腫治療剤「ヘマンジオール」が誕生した経緯を連想しました。

「医師会病院だより」は消化器内科の紹介です。令和4年度は常勤医が1名減ったものの、入院患者数、内視鏡的消化管止血術、治療内視鏡件数は増加しており、救急患者の対応にも積極的に取り組んでいらっしゃいます。

「切手が語る医学」今号の「初日カバー」とは新しく発行された切手を封筒に貼り、発行当日の日付印（消印）を押したもので、切手収集の世界では「切手の誕生日を記録した記念品」として珍重されるそうです。古庄弘典先生からの貴重な資料には感謝申し上げます。

粟博志先生の新連載「音楽の散歩道その2」では本文の資料として、いつも多くの美しい画像が添えられています。大判・カラーになった医報誌面が、一段と豪華に引き立って見えます。

「リレー随筆」は鹿児島医療センターで2年目の研修をされている、増田愛子先生の「縦の成長、横の成長」です。多忙でも充実した研修生活を送る中、「横への成長」は実感されるも「縦への成長」に悩んでおられ、旺盛な向上心で内省される姿勢には敬服いたします。専攻医としても縦横に、ますますご成長されますことをお祈りいたします。

さて、10月には国内最大のスポーツの祭典「燃ゆる感動かごしま国体・かごしま大会」が51年ぶりに県下で開催され、来月から公開競技が始まります。3年前に新型コロナウイルス感染拡大のために延期を余儀なくされての開催です。前回、1972年（昭和47年）の「太陽国体」に際して大規模に開発された与次郎地区の遺産には、今でも私たちは大きな恩恵に与っています。今回の国体も末長く語り継がれる素晴らしい大会となることを願っております。

（編集委員 森岡 康祐）